

2) エヴァンゲリオンにおける心理分析

○人類補完計画について

人類補完計画とは、「かつて誰も成功し得なかった神への道」と言われている。

第25話「終わる世界」にて明かされた、その内容は「人間一人一人の心は、か弱くもろいものだから、それらをつなぎ合わせることによって、補完していくこと。」である。ここに、臨床心理学の視点を重ね合わせてみる。人類補完計画、それは、宇宙意識への回帰を計るものではないだろうか。宇宙意識への回帰を果たした人類、それは、超人類とも言うべき存在であり、神と同等の存在である。

それは、他者との関わりの中で、徐々に、進行していくのである。使徒と呼ばれる敵との戦い、登場人物との人間関係、そこには、自分の内面を見つめ、心を成熟させ、宇宙意識へ回帰するための鍵が含まれているのだ。

○レイについて

エンディングの水中に白く淡い光を放つ月をバックに、彼女のシルエットが映る。彼女は、月の象徴を表した存在だろう。オープニングでの、窓ごしの彼女は、包帯に身を包んでいる。窓は、十字架を思わせる。キリスト教的な暗喩が、所々見られる本作品においては、キリストを産んだとされる聖母マリアのイメージが出てくる。確かに、月の象徴には、母性が大きく関わっている。彼女は、碇ゲンドウの妻であり、シンジの母である「唯」のクローンである。雑巾を搾るレイの姿に、母の姿を重ねるシンジの言葉に、彼女は、無意識に反応し、顔を赤らめる。(第15話)

彼女は、クローンであるが故に「私が死んでも代わりはいるもの・・・」(第19話)と自己の存在価値の希薄さ、虚無感を呈している。「真っ白な少女」という彼女の外見とレイ=零という名前は、虚無感と共に、純白という無垢、清廉さの印象を与える。それと同時に、無口で、無表情の彼女には、底知れぬ、畏怖を覚えてしまう。

エヴァ初号機のエントリープラグの中で、レイは、自問自答する。(第13話)

「わたしは、誰？」

しかし、クローンである彼女は、自分が何たるかがわからない。月の光は、太陽の反射光であり、月は、鏡のようなものであり、精神、心の象徴を持つ。彼女が発した、この問いは、一体、人とは何なのか、心とは何なのか、魂とは何なのかを考えさせられる。そして、彼女のこの問いかけは、合わせ鏡のように、無限に自分の分身を映し出すだけで、彼女の本質を映し出すことはないのである。

そういう彼女が、初めて、自己を表現した言葉が、「絆」(きずな)である。彼女は、他者との関係性の中に、自己を見いだしたのだ。

どうして、エヴァに乗るのか、問いかけるシンジに、彼女は、こう答えている。(第6話)

「きずなだから。みんなとの・・・」

そして、「強いんだなあ。綾波は・・・。」と語るシンジに、

レイは、「私には、他に何も無いもの・・・。」と答える。

絆から、執着が生まれるが、最後は、それを昇華させ、自己犠牲を果たす。

白・・・無智の帰依(ゲンドウに対する絶対服従)

○アスカについて

自己主張と、裏側にある愛情欲求。シャドウフィギア。

プライドと、その裏側の卑屈さ。

美しさと醜さ。→自己の美しさにとらわれていれば、醜さに苦しみが生じる。

例：おすもうさんのようになった時のアスカ

嫌悪、闘争心。

赤・・・右の氣道の象徴。

○シンジについて

エヴァのコクピットとも言える、エントリープラグの中には、LCLという液体が満ちているが、これは、子宮の中の羊水を象徴したものに思える。第7話の、シンジの台詞に、「血の匂いがするエントリープラグなのに、どうして落ちつくんだらう。」とある。

また、”エヴァンゲリオンには、本来、魂がないので、人間の魂を宿らせてある。”という一節があるが、零号機と初号機には、シンジの母である唯の魂が、宿らせてあるのではないだろうか。そう考えると、使徒の襲来によって、瓦礫の下敷きになろうとしたシンジを、動くはずのないエヴァ初号機が、守ったシーンや、シンジがエヴァ初号機に乗っている時に、安らぎを覚えること、母に抱擁されるイメージが出てくるシーンなどが、説明できる。

トウジとの関係では、情についての検討がなされている。

青・・・友情の成立→情の持つ過患

心の働きによって、世界が収束し、あるいは、広がる。すべては、心の現れである。

○ミサトについて

エディプス・コンプレックス、愛着と嫌悪が、ミサトのテーマである。

付き合う男性（加持リョウジ）に、憎しみを持っていた父親のイメージを重ねていた自分に気づく。そして、父を失ったきっかけとなった使徒に対し、使徒せん滅を自分の仕事と言うミサト。また、自分の寂しさを紛らわせるためのセックス（性欲）、その背景にある心の働きを見つめさせられる。

○リツコについて

母共々、ゲンドウに対する愛着と、その裏側の嫉妬心、憎しみによって、自らの心の隙間を埋めることができない。そうして、母、ナオコは、クローンであるレイを絞め殺し、リツコは、レイのパーツを自らの手で破壊した。

○ゼーレの会議席の色・・・5大エレメント（五仏）と一致している。

ゲンドウ以外の5人の席の色

左前・・・黄色（地）・・・意志

左後・・・青（水）・・・功德

右後・・・赤（火）・・・識別智

右前・・・緑（風）・・・修行上の経験

議長・・・白（空）・・・完成

*ゲンドウの席も、白である。

○3人のプラグスーツ

エヴァの搭乗者である3人のプラグスーツの色

レイ・・・白

アスカ・・・赤

シンジ・・・青

これは、人間の内的エネルギーの状態、エネルギーを通す管と一致している。すなわち、

白→タマス（イダー）

赤→ラジャス（ビンガラ）

青→サットヴァ（スシュムナー）

*これは、ロシアの三色旗も、同じ色合いをしている。

○エヴァと使徒との戦い

エヴァも使徒も、同じアダムから生まれている。

一つの仮説だが、アダムから、男性原理である使徒と、女性原理であるエヴァが分かれたと考えられないだろうか。（イサリムによるアダムの話から）

男性原理・・・智慧（シヴァ神） →サハスラーラ・チャクラ

女性原理・・・力（シャクティー女神） →クンダリーニー

男性原理を象徴する「使徒」は、智慧を身につけていく。

女性原理を象徴する「エヴァ」は、力を覚醒させ、解放する。

また、エヴァが使徒を食らうシーンは、メスカマキリが、オスカマキリを共食いしてしまう姿が浮かんだ。女性のエゴ、身勝手さが象徴されているかのようだ。

○神への道

シンジが、エヴァ初号機に乗って、使徒と戦う。

この真の意味は、こうだ。

クンダリーニ（エヴァ初号機）が、中央管（シンジ）を通過して、サハスラーラ（使徒）に到達すると、甘露（ネクター）が落ちる。この甘露が、神々の身体を作っていく。（ツァンダリーのプロセス）

実は、この甘露は、脳内モルヒネと呼ばれる、エンドルフィンと同じものだと言う。そのエンドルフィンを引き出すものの神経が、A10 神経である。

●A10 神経（エーテンしんけい）・・・快感神経のこと。脳内モルヒネを引き出すものの神経を指す。人間の脳には記憶を司る海馬という部分があるが、この海馬は、A10 神経の支配下にあるとされている。エヴァの操縦は、このA10 神経とのシンクロ率とインパルスの相性や適応度が、最も重要視される。

神々の身体を作り上げるためには、男性原理と女性原理の合一によって、甘露を落とすことが必要である。A10 神経とのシンクロ率が重要視されるのは、このことを背景にしているのではないか。

男性原理と女性原理の合一は、例えば、レイとシンジの機体相互交換実験や、アスカとシンジの共同訓練による、使徒への攻撃などに表現されているように思う。

また、シンジは、アスカの初戦の時、アスカのブラグスーツ（女性用）を着せられている。反対に、アスカは、おすもうさんのようなブラグスーツを着るはめになる。（笑）

○用いられている手法

- ・「私はだあれ？」→四念処の瞑想
- ・死の危機を通じて、生を見つめさせる。→生とは何か？死とは何か？
- ・エヴァに乗ること＝非日常性、と家庭、学校＝日常性が交互に繰り返されながら、心理的变化を描いていく。（生起と究竟）
- ・機械と人間の違い。→心とは何か？
- ・人間とダミーとの違い。→魂とは何か？
- ・人間とエヴァ、使徒の違い→神とは何か？
- ・なぜ、エヴァに乗るのか？→自分の存在価値を考えさせる。
- ・シンジが、エントリープラグ内に取り込まれてしまった時→自我の境界は？
- ・言葉から形成されているイメージをうまく使っている。
- ・味方と敵→自己とは？他者とは？

- ・自分と内側にいるもう一人の自分→表層と潜在
- ・心の中の自分を見つめさせる。
- ・幼い頃のトラウマ（精神的外傷）が、いかようにして、人格形成をしていくかが明確に描かれている。
- ・自分の中にいる他者と、他者の中にいる自分が、同じステージに立ち、その内側の世界を見つめさせる。そして、そのステージに立っている自分と他者を見つめる、もう一人の自分ともう一人の他者。→人類補完計画の進行
- ・最後に、自と他の区別のない世界が断片的に描かれている。（ただし、無と空の違いが明確でない。）
- ・カヲルが言う。「自らの死、それが唯一の絶対的自由なんだよ。」
→絶対的自由という言葉が出てくる。
- ・すべては、心の現れである。心の変化によって、世界が変化する。

to: ヴァジラロカ師

from: ユダチッターナ・サッチャ・ヴァーヤーマ・パダーナ

date: 1997/5/7 2:00

ご依頼のものをお送りします。ura.txt は、ビラの別原稿です。

一応、まず、kabara.txt で解説の前提となる事項を取り上げています。私は、外側の物語と内側の物語という二つの側面で捉えてみました。

外側のものとして eval.txt を参照して下さい。これは、フリーメーソン路線で展開していくのがよいでしょう。ビデオとしては、「魔笛」「情報汚染社会（後編）」などが適当だと思います。ただし、魔笛は長いので、部分的に見せるなどの工夫が必要です。その他、解説をする時に、TV版ビデオの画面を見せるとか、別の資料を用意するなどしたらよいと思います。eva2.txt に関してはデータを集めたのみで理論展開をするに至っていません。興味を引くのに、使徒には天使の名前がつけられているとか使えばよいと思います。

内側のものとして、sinri1.txt を参照して下さい。これは、臨床心理学、その中でもヴィジョン心理学を題材として、真理に持っていこうと考えたものです。その解説に必要なデータをまとめました。sinri2.txt で、実際の解説及び真理への結びつけをしようと思いましたが、これも、今だ未完成のままです。

特に、内側の心理描写が優れているのが、この作品の斬新さなので、後半の16話以降、19・20・21・・・というのは見ておいたらいかがでしょうか。前半は、フィルムブックで見れば十分ではないかと思えます。

ともかく、これを導きに使う場合、ある程度、精通した人が不可欠です。

河本さんなどは、かなりマニアックなので、協力していただけたらどうでしょうか。

内側の部分は、ヴァジラディーラー師が心理学に詳しいので、考えていただけたらよいと思います。

かなり、個人的なこじつけの部分もありますが、ベシエルによって書かれていて、真の意味は、明かされないことになっているといった感じで自信に満ちた態度が成功の鍵だと思われま。

あらかじめ、入会までのストーリー、展開を考えてしまうのがポイントです。行き当たりばったりでやると失敗します。それから役割分担が大切なこととオウムを出したりするのは、個人的なアプローチの段階で行うことが重要だと思います。また、上映会という形以外に、信徒さん紹介の導きの中で、話題の一つに取り上げるのも有効かと思ひます。

とにかく上映会の場合では、決してオウムとださないのが重要かと思ひます。

以上

「脳内革命が、人類を補完する鍵だ!!!」

——脳内革命とエヴァンゲリオンの謎を解く——

○人類補完計画について

人類補完計画とは、「かつて誰も成功し得なかった神への道」と言われている。

では、神への道とは何か？

結論から言うと、それは脳内革命を起こすことである。

○エヴァンゲリオンの謎を解く

ところで、エヴァの搭乗者である3人のプラグスーツの色は、

レイ・・・白 アスカ・・・赤 シンジ・・・青 である。

これは、聖典によると、人間の内的エネルギーの状態とエネルギーを通す管と一致している。

すなわち、△白→暗性 (イダー管)・・・左

△赤→動性 (ピンガラ管)・・・右

△青→善性 (スシュムナー管)・・・中央 である。

また、エヴァも使徒も、同じアダムから生まれている。

ここで、アダムから、男性原理である使徒と、女性原理であるエヴァが分かれたと考えてみる。

◆使徒 (男性原理)・・・智慧→「使徒」は、智慧を身につけていく。

◆エヴァ (女性原理)・・・力 →「エヴァ」は、力を覚醒させ、解放していく。

○神への道

エヴァ初号機に、シンジが乗り、使徒と戦う。その意味を明かそう。

それは、女性原理を表すクンダリーニーと呼ばれる霊的エネルギーが、覚醒し、身体の中央にあるスシュムナー管を上昇して、

男性原理を表す霊的センター、サハスラーラ・チャクラに到達するということ。

到達すると、甘露 (ネクター) がしたたり落ちる。

聖典によると、そのネクターは、至福をもたらす、神への道を開くとされている。

そして、このネクターは、脳内モルヒネと呼ばれる、エンドルフィンと同じものだと科学的に解明が進んでいる。

そのエンドルフィンを引き出すもとの神経が、A10 神経である。

●A10 神経 (エーテンしんけい)

・・・快感神経のこと。脳内モルヒネを引き出すもとの神経を指す。

人間の脳には記憶を司る海馬という部分があるが、この海馬は、

A10 神経の支配下にあるとされている。

エヴァンゲリオンの操縦は、このA10 神経とのシンクロ率が、最も重要視される。

人類補完計画、神への道は、ネクターを落とすことが必要不可欠な条件である。すなわち、脳内革命を起こす必要があるのだ。

さあ、あなたも脳内革命を起こし、新人類補完計画を成功させよう。

第一回 新人類補完委員会 開催 —集え！人類を補完するために—

sub-subjekt:新人類補完計画「脳内革命を引き起こせ」

(脳内革命のメカニズム及びメソッドを公開予定)

time:

at:

ticket:¥1000

この件に関する申し込み、お問い合わせは、下記の連絡先まで。

新人類補完委員会

○はじめに

「新世紀エヴァンゲリオン」には、二つの側面がある。その一つは、この地球を舞台とした人類の未来という外側の物語と、登場人物の内的心理描写によって展開していく内側の物語である。そして、この両面とも、これから、世期末を生きていく私達にとって、重要な示唆を含んでいる。それは、どうしてかという、この物語には、謎が多く、秘密が隠されているからである。この謎を解読できる限り、解きあかしてみたい。

○解読の鍵「カバラ」

物語全般には、多くの秘教的シンボルが、隠されている。特に、重要になってくるのが、カバラである。カバラとは、ユダヤ教の秘儀であり、そこには、神との合一が秘されている。人類補完計画を、誰も成し得なかつた神への道と言っているのも、カバラを前提とした設定である。

それでは、ユダヤ教について、簡単に触れておこう。

ユダヤ教には、三つの段階が存在する。第一段階は、「旧約聖書」により、その信仰を進める。第二段階は、「タルムード」と呼ばれる経典を読み、実践する。第三段階が、カバラ密教である。そして、このカバラ密教は、神への合一、および宇宙の創造主と合一するということを目的としている。

○アダムについて

以下の存在すべてが、アダムである。

- セカンドインパクト時に登場した光の巨人。
- 加持リョウジが、ネルフに持ち込んだ、胎児のように見えるサンプル。(ちなみに、このサンプルは、第10話に出てくる使徒の幼生と酷似している。)
- ターミナルドグマに磔になっている上半身のみの巨人。(カヲルによるとリス)

この物語では、アダムという存在が、キーワードになっているようだ。このアダムに、複数の意味がかけられている可能性がある。実際、カバラ的な解釈では、アダムは、複数

いるという考え方が成り立つのである。

イサリムによれば、イスラエルの秘密教義では、4人のアダムを規定している。

最初のアダムは、天上に、第2のアダムは、アルツイトの球(後述する”生命の樹”に描かれている丸の一つ)に、第3のアダムは、光の体に身を包んでいる存在であり、イエツィラーの球の中に住んでいる。ここまでのアダムは、両性具有である。

第4のアダムは、第3のアダムがアッシュァー(現世)に落ちた姿であり、本性に分裂が起こって、男性的な力と女性的な力に分かれている。

これらのアダムは、いずれも、霊的、物質的根源とってよい存在である。

同様に、ゾハールによると、アダムは、2人で、第一のアダムは、天上の存在であり、第2の地上のアダムを自分に似せて創った。

カバラ的な文脈で捉えると、アダムには、創造主、神々、神人といった、すべての意味が含まれそうである。

また、アダムは、旧約聖書の中では、最初の人類だが、カバラ的解釈を加えると、最初の人類=救世主と考えることができる。また、救世主であった、イエス・キリストは、天なる父の御子と言われており、この天なる父とは、創造主と考えることができる。すなわち、救世主は、神の子供、神の化身とも言える存在なのである。

すなわち、アダムという言葉には、創造主、神々、最初の人類(=救世主)という複合的な意味がかけられている可能性が高い。

そして、セカンド・インパクトで現れた”光の巨人”であるアダムは、第3あるいは第4のアダムと関係がありそうである。また、救世主と考えてもよいだろう。

○カバラの宇宙観(世界観)について

また、上記のイスラエルの秘密教義におけるアダムの話から、カバラの宇宙観を見てとることができる。

その宇宙観は、魂の落下として、三つを大分している。それは、階級的意識世界と言える神聖世界が、まず存在し、次に、男女の登場による愛欲の神々の世界の成立、そして、人間世界以下の邪悪な世界の成立という区分である。

○「エヴァンゲリオン」で用いられている宗教的象徴及び用語について

それでは、実際に、物語の中で出てくる、カバラを初めとした宗教的象徴を帯びたものや言葉を見てみよう。

●生命の樹（セフィロトの樹）

ネルフ本部、司令官室の天井に描かれている絵。オープニングにも出てくる。

生命の樹は、神・人間・宇宙の隠された構造を解くマスターキーとしての象徴である。それと同時に、この図は、人間が神に近づいていくためのプロセスが示されている。

●さかさまの樹

オープニングの最初に出てくる絵。

生命の樹と同様、10個のセフィロト（生命）が描かれている。

天に向かって、根を広げていて、また、地に向かって、枝を広げていて、また、地に向かって枝を広げている。（宇宙の顕現の象徴とされている。）

この図は、人間が神から遠ざかっていくプロセスを示している。

●七つの眼

ゼーレの紋章。また、ターミナルドグマのアダムの顔。

これは、いろいろな意味があるが、その一つに、キリストの聖体という意味がある。

神の子羊（キリスト）の象徴である。

●12枚の羽

オープニングの「残酷な天使のテーゼ」の歌詞には、「だけど、いつか気づくでしょう。その背中には遙か未来を目指すための羽があること。」という一節があり、エヴァ初号機には、左右6枚、計12枚の羽が描かれている。

実は、12枚の輝く羽を持つのは、墮天使ルシファー＝悪魔の王、サタンサタンの象徴なのである。エヴァ初号機には、サタンの象徴が重ねられているのだ。

●エヴァンゲリオン（EVANGELION）

ドイツ語で、EVANGELIUMの意味は、宗教用語で、「福音」の意味である。

また、俗称として、「絶対的な」真実という意味もある。

●エヴァ（EVA）

ドイツ語。英語では、イブ（EVE）。

旧約聖書に出てくる人類の最初の男、アダムの妻の名前。

禁断の果実を食べたことによって、エデンの園から追放された。

●使徒（ANGELS）

天使。神の御使い。神聖な事業に献身する人。

キリストが、福音を伝えるために選んだ12人の弟子。

●アダム

先に挙げたが、旧約聖書では、神によってつくられた最初の人類。

カバラ的な文脈で捉えると、創造主、神々、あるいは、救世主。

●リリン

旧約聖書に出てくる、アダムの最初の妻。第17使徒である、カオルは、人類のことをリリンと呼んでいた。

●リリス

アダムとリリンの子供のこと。

●ヘブズドア

天国の扉。

●マギ

新約聖書に出てくる、イエス・キリストが誕生した時の”東方より来たりし三賢者”のこと。

ネルフにあるスーパーコンピューター・システムに、この名が、付けられている。

このコンピューターには、開発者である赤木ナオコの人格が移植されている。

メルキオール、バルタザール、カスパーとは、科学者、母親、女性としての人格を持った、3つの独立したコンピューターであり、同一問題を協議し、多数決で決めるという、人のジレンマを残した、民主的かつ合理的なコンピューター・システム。

● ロングノスの槍

キリストが、ゴルゴダの丘で、十字架にかけられた時、処刑人のロングノスが使った槍のこと。伝説では、キリストの血のついた、この槍を手にしたものは、世界を手に入れられるとされている。

● ドグマ

宗教や宗派の中で、正統として認知された教義。

cf: ターミナル・ドグマ・・・セントラル・ドグマ内の最も深い所。

アダムが、ロングノスの槍で張り付けされている場所

● ジェリコの壁

ジェリコ（エリコ）とは、ヨルダン川西岸にある町。

旧約聖書にある「エリコの戦い」に登場する歴史的な町。

難攻不落の要塞。

● 「GOD'S IN HIS HEAVEN. ALL'S RIGHT WITH THE WORLD.」

ネルフのシンボルマークの下にある英文。

イギリスのビクトリア朝の詩人、ロバート・ブラウニングの作品中の文句。

「神は、天に在り、世はすべてこともなし。」という意味。

● 死海文書

1947年に、パレスチナにある死海の北西岸にある洞窟で発見された巻物。

紀元前125年から紀元後68年のイザヤ書などの旧約聖書の断片などを含んでいる。イエスの新しい解釈が、この死海文書で可能となった。しかし、この死海文書には、多くの謎が隠されている。今、発見されている写本以外にも、重要な文書が、すでに発見されているが、いまだに公開されていないという説がある。

その隠された文書には、予言が書かれていて、地球上で起こったことが、すべて書かれているという。また、未来に起こるであろうことも書かれているとされている。

それを、ゼーレが入手していて、そのシナリオ通りに、すべてを動かしているのではないかと推測できる。

エヴァンゲリオンにおける心理分析

1) 分析の道具となる心理学の知識について

○ 臨床心理学について

まず、臨床心理学には、大きな方向性として、自己の性格や、心理ブロックに気づき、そのブロックを解消することによって、個体意識から、全体意識・宇宙意識を回復するという流れがあります。

それでは、個体意識が、どのように形成されるかですが、出生時に、バーストラウマ（*トラウマ：精神的外傷のこと。）による分離感と、生死・親子・所有・労働・闘争といった観念によって、個体意識が、徐々に強固になります。

元来、胎児は、母胎内で、心地よい、満ち足りた宇宙意識にとどまっていると言われてます。胎児は、自らの肉体を自己と同一視しておらず、直感的に、自らを純粋な自己意識・観照意識の広がりとして自覚しているのです。

ところが、出産時の、出産ショック（バーストラウマ）によって、自己の存在基盤である母胎内の羊水から放り出され、自己と一体であった宇宙の突然の消滅、宇宙からの分離感・孤立感という強烈な錯覚を持ちます。

この時のショックが、あまりにも強烈なために、自己の宇宙意識としてのアイデンティティと宇宙的な直感智等の能力を失うことができます。すなわち、宇宙的な記憶喪失の状態になると考えられるのです。このことが、出産時における、最初の個体意識形成のプロセスになります。

さらに、授乳による肉体維持という事実から、生死という、元来、宇宙意識の時にはなかった観念的錯覚を持ちます。宇宙意識には、時間・空間による制約ということは存在しません。同じように、親子・所有・労働・闘争という、宇宙意識の時には、持ち得なかった観念的錯覚や分離意識を積み重ねていくことになります。このように、人間としての出生・生存を経験する魂は、徐々に、この現実の世界（現象界）において、他の個体とは違う、独立した存在として、自己のアイデンティティ、すなわち、個体意識を形成していくのです。

通常、我々は、この現象界で、各々の存在を、個々、独立した実体と見ています。しかし、宇宙意識のもとに、この世界を見れば、純粋な観照意識である自己意識の無限の広がりの中に、存在すべてが、幻影にすぎないものとして、見えることでしょう。そして、存在全てを自己と同じものとして、一体感と親和性（=愛）を持って、存在を見ることができはらずです。

また、宇宙意識の性質として、数千年も前から、ヨーガや仏教では、絶対的な自由・絶対的な幸福・絶対的な歓喜といった性質が述べられています。このような宇宙意識を回復する手段として、心理学では、多くの手法が存在します。

その多くの手法の中から、エヴァンゲリオンで用いられている心理描写を分析するために、ここでは、ヴィジョン心理学を取り上げます。

○ヴィジョン心理学について

ヴィジョン心理学は、アメリカの臨床心理学者であるチャック・スペザーノ博士が創設した、まだ新しい臨床心理学の手法です。この心理学の中心的コンセプトは、人間関係を通しての自己変容、リレーションシップを通しての自己の心理ブロックへの気づきと癒し、パーソナリティ（人格）の成長です。ここで言う、リレーションシップとは、男女関係、家族、組織などの間における関係性のことで、ヴィジョン心理学は、この関係性の場こそ、人格成長を加速するのに最も役立つものとして、日常の場での親密感やつながりを積極的に評価します。

そして、自己の内面へ視点を向け、自分自身の表層意識のパーソナリティと、潜在意識・深層意識、さらには、一種の宇宙意識であるハイヤーセルフ（大いなる自己）との関係性の現れが、この日常の場での人間関係であるという捉え方をします。

表層意識のパーソナリティとハイヤーセルフとの関係性においては、神秘力の恩恵を受け入れることによって、ヴィジョン・レベルという段階（*この段階では、インスピレーションが連続的に発生すると言われていています。）を経て、宇宙意識との一体感へと踏み込んでいきます。

また、表層意識のパーソナリティと、潜在意識・深層意識の関係性においては、まず、出産時の、パーストラウマによる強烈な喪失感が、日常の場での根本的孤独感の底にあることを見ます。

そして、3歳から5歳時に形成されるトラウマとして、“エディプスコンプレックス”があります。これは、幼児が、異性の親に対して、初めて性的関心を持ち始める時に形成されるもので、幼児は、この時、自分が持つ性的関心において、強い罪悪感を感じます。故に、幼児は、この罪悪感の痛みを感じないように、自分の潜在意識に、この罪悪感を押し込め、ふたをしてしまうのです。そして、この潜在意識に押し込められた罪悪感が、彼が、大人として成長した後、日常の場での人間関係を進める上で、足を引っ張っていくのです。このエディプスコンプレックスの罪悪感があると、人生において、ここ一番という大切な場面で、例えば、仕事の成功目前といった場面で、自らに成功をもたらすことを、無意識的に自らが破壊するといった行動に出たりするわけです。また、日常的に、なんだか、わけのわからない無価値観や虚無感として現れることもあります。

この他、この幼児期に形成される様々なトラウマが、彼の一生を通じて、人間関係のあり方に、重大な影響を及ぼし続けるのです。パーストラウマや、エディプスコンプレックスといった、初元的なトラウマの他に、母胎内にいる時に、主に、母親の心理状態の影響によって形成される出生前トラウマがあります。実は、さらに、意識を深くさかのぼると、膨大な過去生において、積み重ねられてきた様々なトラウマが存在していることがわかります。

たとえば、その一つとして、シャドウフィギヤーというトラウマがあります。これは、「自分は、こういう人間にだけは、絶対、成りたくない。」「自分は、こういう人間だけは、絶対に、許せない。」といった特定の人間像に対する、強烈な拒絶意識のことです。これは、自分自身の一部分を否定し、見ないように、潜在意識に押し込めた、いわば、その否定された自分自身の一部分の姿なのです。これは、何生にも渡って、潜在意識の中に持ち越され、徐々に、さらに深い意識レベルへと沈み込んでいくと共に、大きなエネルギーを持つようになります。それが、何かのきっかけで、表層に浮き上がってきた時、それは、その人にとって、まるで化け物のように見えることもあります。

さらに、深い意識層には、宇宙意識の少し手前に、個人の意識を越えた、人類全体に渡る、集合的無意識といったものがあります。これは、ユングが言っている、アーキタイプ（元型）のことで、個人の生活にとって、建設的であるか、破壊的であるかにお構いなく、ほとんど自然の力として機能する意識エネルギーのことです。

このように、表層、潜在・深層に渡る様々なトラウマを、人間関係、リレーションシップを通じて、気づき、それを癒すという繰り返しによって解消し、一体性を回復させて、最終的には、宇宙意識との合一を果たそうというのが、ヴィジョン心理学のねらいです。

○＜成長の三角モデル＞について

この心理学の中心モデルとして、＜成長の三角モデル＞というものがあります。

以下に、この三角モデルの模式図を示します。

（実際は、▲が三角形の頂点になります。△出生は、▲出生と重なります。）

▲出生

↓

↓ 依存レベル（被害者意識）

↓

▲孤立

↓

↓ 自立レベル（加害者意識）

↓
▲コミットメント
↓
↓相互依存レベル
↓
△出生（→一体感・合一へ）

◎依存レベルについて

- ・誕生から幼児期にかけて、体験する原型的な痛みを経て、成人自我を確立するまでが、依存レベル（被害者意識）です。
- ・内容を要約し、取り上げられている項目を列挙すると、ニーズ・喪失感・恐れからハートブレイク・いじけ・罪悪感・犠牲・無価値観へと向かいます。

◎自立レベルについて

- ・そして、次の段階である自立レベル（加害者意識）へと入っていきます。この自立レベルは、前の段階である依存レベルで負った、原型的な傷を隠し持った補償行為としての人生の旅を示しています。
- ・自立レベルの内容として、同様に列挙すると、期待・要求・ストレス・相手をコントロールすること・パワーストラグル（パートナーとの主導権争い）・義務・デッドゾーン（これは、倦怠期を意味する。）といった流れになります。

◎依存レベルと自立レベル

- ・もちろん、この依存レベルから自立レベルへの流れは、決して一回限りの単線的なものではなく、一種のパターンとして、何度も何度も、人生で繰り返し行われるわけです。
- ・この依存・自立レベルでの心理ブロックの気づきと癒しを行う一方、コミットメントというキーポイントを経て、人生で最も意義のある、相互依存のレベルに入っていきます。

◎相互依存レベルについて

- ・コミットメントとは、特定の具体的関係に、自らの身を投入する決意を意味します。
- ・このコミットメントを経て、相互依存レベルに入っていくわけですが、相互依存とは、共同創造とも言い換えることができます。

・これは、一組のペアなり、一つのまとまった組織体なりの中で、構成員が、互いの存在を内面・外面とも深く理解しあい、愛と受容性を基に、それを受けとり、与え合い、人間的成長を共にすることを決意し、関わりあっていく段階のことです。

- ・この心理学では、この相互依存・共同創造のレベルを目標の一つにおきます。
- ・相互依存レベルの内容として、同様に列挙すると、リーダーシップ・ヴィジョン・マスタリーといった流れがあります。ヴィジョンというレベルでは、インスピレーションの連続的発生をもたらします。マスタリーとは、仏教で言う、悟りのようなものと捉えればよいでしょう。

・ここでは、受容の精神や、自然の諸力を包含する意識エネルギーであるグレートスピリット、内なる啓示意識、そして、一種の宇宙意識であるハイヤーセルフ、魂といった、いわば宗教的な意識世界を扱うことになります。

○ヴィジョン心理学の特徴

通常の心理学では、これまで取り上げた、依存・自立レベルへのアプローチに留まるのに対し、一方、多くのニューエーজ的手法は、一気に、無意識や宇宙意識へのアプローチに飛躍しがちですが、ヴィジョン心理学は、日常性と非日常性の両方にまたがる架け橋となるとともに、そのバランスのよさが特徴です。

あらゆる問題を解決し、進化成長を果たしていくのに、人間関係を活用していくわけです。特に、相互依存のレベルに入ると、意識の深い部分で、パートナーとのコミットメントに次ぐコミットメントが必要になります。新たな問題に直面する度に、ともに問題を解決し、一緒に先のレベルへと進む決意を新たにするわけです。

最終的には、一人の人間の、内面的男性性と女性性、つまり、能動性と受容性の統合や個人の表層、潜在・深層の各意識レベルの統合に向かうとはいえ、パートナーとの共同創造を、これほど重視する手法は、他にはあまりないと言えるでしょう。

もちろん、パートナーと近づけば近づくほど、深い部分で眠っていた、両親、兄弟姉妹への恨みつらみや、もっと深い部分の様々な心の傷（トラウマ）が浮上り、関係はきつくなります。これを解決するに従い、パートナーへの親密感と創造性が増していくわけです。このように、人間関係を活用することで、自分だけでは気づきづらい深い部分に埋もれている心の傷を表面に浮上させることができるだけでなく、その手ごわいトラウマに対し、乗り越える勇気を培うことができます。

○投影の理論

この心理学で用いられている理論の一つに、投影の理論があります。

例えば、ペアを組み、「どんな自分になりたいか」といったテーマで、自己紹介をした後に、今度は、相手の人格になったつもりで、相手の人格、考えなどを、他個紹介します。その後、ペアの相手が、どんな人か印象を紙に箇条書きにし、各自、発表します。

そうすると、発表した内容というのは、実は、相手の状態ではなく、発表者自身の状態を反映しているものに他ならないのです。

相手の上に見える印象というのは、自分に対して、自分自身が潜在意識で判断している自己評価の内容が投影されていると考えることができます。この、潜在意識の、自分に対する自己評価の内容を、相手に投影させて見ているだけなのです。

人は、皆、自分の潜在意識にある観念のフィルターを通してしか、存在を見ることはできません。同じ対象に対しても、人によって、それぞれ見え方が違うのです。例えば、まだ観念を持っていない生まれたばかりの赤ん坊は、目に映る風景を、大人のように存在世界として認知していません。観念による意味付けができて初めて、存在世界として見えるわけです。この理論を進めていくと、人は、存在それ自体を、直接知ることができないこととなります。存在それ自体を見ているのではなく、対象に投影した、自らの観念の形を見ているのです。したがって、自らの観念の内容を変えてやることによって、存在の見え方、世界自体が違って、見えてくるのです。

○ネルフについて

●ネルフ (NERV)・・・ドイツ語で「神経」という意味がある。

特務機関ネルフは、2005年に発足した、国連直属の非公開組織。その目的は、「使徒」と呼ばれる、人類の敵の調査・研究・せん滅（捕獲）にある。

ネルフ指令官・碓ゲンドウと副指令官・冬月コウゾウの初対面は、1999年で、セカンド・インパクト後の調査船で、再び、出会う。この調査船には、セカンド・インパクトの生き残り、葛城ミサト（当時16歳）も保護されていた。

2003年に、ゲンドウは、人工進化研究所の所長になっている。そこを訪ねた冬月は、セカンドインパクトの真相に関連した台詞を言っている。

箱根にある同研究所の地下、のちに、ジオフロントと呼ばれる、地下空間（元は、球状であり、2015年には、81%が、地下に沈んだ状態になる）に、建設中なのが、ネルフ本部である。

そこには、製作中のエヴァ零号機があり、生体コンピューターの基礎理論を模索する赤木ナオコがいた。後に、MAGI（マギ）と名付けられるネルフのメインコンピューターは、リツコの母・ナオコがつくっている。

「あの巨人を、我々ゲルヒン（人工進化研究所の略称）では、アダムと呼んでいます。が、これは違います。」という台詞がある。巨人とは、光の巨人のことだろう。これとは、エヴァ零号機のことであり、「アダム再生計画」（通称・E計画）のひな型だとゲンドウは述べている。

おそらく、すでに、ゲンドウは、ゼーレの一員であったはずである。ゲンドウが所長になったのも、ゼーレの意思が働いているのだろう。

2004年、エヴァ零号機の実験に、ゲンドウの妻、ユイは、3歳のシンジを連れてくるが、実験中の事故で、ユイは死亡した。（1977年生まれ、享年27歳。）

その死亡を、心の片隅で喜んでいたナオコは、これ以前から、ゲンドウとの肉体関係を持っていたようである。

ゲンドウは、一週間の失踪の後、「アダム計画」と「人類補完計画」をスタートさせる。アダム計画とは、南極で捕獲した、オリジナルのアダムの再生計画のことである。ゲンドウは、従来のE計画に加え、二つの計画書を同時進行させることになる。

2008年、赤木リツコは、ゲルヒンの人所を内定し、「E計画」に配属される。

ゲンドウが、綾波レイを連れてくるが、レイは、シンジの母、ユイに生き写しだった。（実は、レイは、ユイのクローンであることが、後に明らかとなる。）

その後、生体コンピューター・システム、マギが完成している。生体コンピューターとは、心臓部に、人間の脳に近い、合成有機物質の人工頭脳を使ったものである。

レイの言葉で、自分がマギシステムを作るために、ゲンドウに利用されていただけと思ったナオコは、逆上し、レイを絞め殺して、自分も自殺する。（ナオコには、レイが、ユイのクローンだとわかっていたようである。）

この2008年に、調査機関であるゲルヒンは、解体され、遂行組織である特務機関ネルフが誕生する。ゲルヒンを解体したのは、人類補完委員会であり、この組織が、ネルフの上部組織であることがわかる。

○エヴァについて

○使徒について

●使徒は、西暦2000年、セカンドインパクトの時、最初に現れ、15年後の2015年以降、第3使徒が現れ、次々と登場する。

●第1使徒を、光の巨人とすると、第2使徒が不明。ゼーレによると、全部で、第17使徒まで登場すると言う。

●使徒に名付けられている名前は、天使の名前がつけられている。ディオニュシオスの「天上位階論」やトマス・アキナスの「神学大全」によると、天使には、9階級あり、使徒につけられている名前は、その最下位、エンジェルズの天使達の名前であり、彼らは最も人間に近いと言われている。

天使の記述は、膨大なものがあるが、特に働きが決められている天使達の名が、使徒に使われている。

第3使徒・・・サキエル（水）

第4使徒・・・シャムシェル（昼）

第5使徒・・・ラミエル（雷）

第6使徒・・・ガキエル（魚）

第7使徒・・・イスラフォル（音楽）

第8使徒・・・サンダルフォン（胎児）

第9使徒・・・マトリエル（雨）

第10使徒・・・サバクィエル（空）

第11使徒・・・イロウル（恐怖）

第12使徒・・・レリエル（夜）

第13使徒・・・バルディエル（霞）

第14使徒・・・ゼルエル（力）

第15使徒・・・アラエル（鳥）

第16使徒・・・アルミサエル（子宮）

第17使徒・・・タブリス（自由意志）

*使徒が出現した場所や攻撃方法などは、これらの名前に応じたものになっている。

●「ブラッドタイプ・ブルー」と表示され、反応が青だと、ネルフは、使徒と判断している。

●遺伝子記号の配置と座標は、99.89%まで人間と酷似している。

●核（コア）、別名、光球という部分があり、ここが使徒のすべてを制御しており、かつ、唯一の弱点。

●S2機関という永久機関を持っている。

●ATフィールド（絶対不可侵領域）を駆使する。

→「何人にも侵されざる、聖なる領域、心の光」とカヲルは言う。

→「誰もが持っている、心の壁」とカヲルは、言っている。

●人類の通常兵器では役に立たない。

●爆発する時の閃光が、十字の形をしている。

●体に比べ、小さなどくろを思わせる、顔のようなものを持っている。

●アダムから生まれた。

最後の使徒、カヲルは、ゼーレから直接送られてきた、フィフスチルドレンでもあった。ということは、ゼーレと使徒とは関係があることになる。

ゼーレは、自分達を、神の御使い（=天使）と考えていることだろう。実際、使徒の形状は、ピラミッドやヤーウエの眼をモチーフにしたものが、ほとんどである。

使徒は、愚鈍な人類を滅ぼし、選ばれた人類を、神に近づけていく試練の象徴ではないだろうか。その試練の一つに、最終戦争（ハルマゲドン）がある。ゼーレの策略そのものを象徴しているのかもしれない。そういう意味合いが、オープニングの「残酷な天使のテーゼ」という歌の名前に、現れているように思う。

○リリスとリリンについて

ユダヤの経典「タルムード」によると、リリスとは、神によって、アダムと共に、一対で、土より造られた最初の女性で、アダムの最初の妻である。

彼女は、アダムと同じ土で造られたため、平等であることを求めたが、アダムは、男性の優位を象徴する正常位でしか交わろうとしなかった。奔放なリリスは、腹を立て、神ヤーウエに訴えた。

すると、翼が生えたので彼女は、エデンを去り、紅海に隠れた。(ここで、彼女は、悪魔との快樂に浸り、アダムは神に泣き言を言ったという説もある。)

これに怒った神は、3人の天使を派遣し、リリスに、アダムの所に帰らないなら、リリスの多くの子供達を、毎日100づつ失うことになる脅迫した。この子供達が、リリンである。リリスは、これを憐み、紅海に身を投げたが、哀れに思った天使によって、代わって、人間の赤ん坊の運命を左右する力を持った。(この伝承の読み取り方には、諸説がある。)

●最後の使徒である、カラルは、多くの謎をはらんでいる。

- ・カラルは、セカンドインパクト発生の同年、同月、同日に生まれている。
- ・クローンであるレイに、「君は、僕と同じだね。」と言っている。
- ・人類を「リリン」と呼ぶ。
- ・エヴァシリーズを「アダムより生まれし、人間にとって忌むべき存在」と言う。
- ・エヴァ式号機に、「アダムの分身、リリンの僕」と話しかける。
- ・搭乗者のいないエヴァ式号機を操れる理由を「エヴァは、僕と同じ体で出来ている。アダムより生まれし存在だからね。」と話している。
- ・アダムに対して、「アダム。我らの母たる存在。アダムに生まれしものは、アダムに還らなければならないのか。人を滅ぼしてまで。」と言う。

- ・ターミナルドグマのアダムをリリスと確認した。
- ・天国への門、ヘブンズドアを開く。
- ・シンジに対して、次の発言を残し、初号機に、命を断たれた。
「僕が生き続けることが、僕の運命だからだよ。結果、人が滅びてもね。」
「だが、このまま死ぬこともできる。生と死は等価なんだ、僕にとってはね。」
「さあ、僕を消してくれ。そうしなければ、君らが消えることになる。滅びの時を逃れ、未来を与えられる生命体は一つしか選ばれないんだ。」

それでは、解説に入っていこう。

○タイトル「新世紀エヴァンゲリオン」について

まず、新世紀とは、この物語が中心的に展開されていく、西暦2000年以降を示す時代背景であると同時に、新しい「創世紀」を示す言葉であろう。

エヴァンゲリオンについては、この物語がスタートする前に、実は、「エウアングリオン・テス・バシレイアス」というラジオ番組があった。そのラジオ番組は、世界に向けて電波を飛ばしており、“御国の福音”という意味だったそうである。そのラジオ番組との関連性を考えざるを得ない。

エヴァンゲリオンは、ドイツ語に同じような単語があり、「福音」という意味がある。ところで、聖書には、次の一節があるそうである。

「御国の福音が全世界にのべ伝えられた後に、世界の終わりが来る。」

かくして、この物語は、大ヒットするのである。あるいは、初めから、大ヒットするように仕組まれていたのかもしれない。そうすると、世界の終わりは近いことになる。

また、劇場版の副題である、「DEATH AND REBIRTH」は、文字通り、訳すると、「死と再生」だが、これも、「死と転生」という名のダンス・オペレッタの名前と関連性を持ったネーミングである。このダンス・オペレッタは、以前、ロシアのクレムリン宮殿内の劇場で公演された。この宮殿内での、ロシア人以外の外国人による公演は、異例の事態であり、初めてのことだった。その外国人とは、実は、日本人である。

○死海文書とベシエルの技法について

この文書は、キリスト教関係の文献である。これは、1947年2月に、死海(アラビア半島北西にある湖)に近いクムランで発見された大量の文書のことを指している。

約12本の完全な巻物と何百もの断片からなる文書は、キリスト教発祥とほぼ同時代のものとも言われる。

クムランには、修道院があり、イエスが一時、そこにいたという説は、研究者の間で有力となっている。

庵野監督自身、いくつかのメディアで語ったところによると、死海文書には、公表されていない部分があるという。当然、「エヴァ」で取り上げられている、死海文書は、未公開部分に、人類に関する重大な事項が記されているという設定である。ゼーレは、死海文書に従って、行動しているらしい。碓ゲンドウも、その中身を知る数少ない人物の一人である。

死海文書は、聖書の真相を明かすものと言われている。特に、一般に出回っている、新約聖書は、さまざまな改訂がなされていて、真実と程遠いものという説もある。そして、この新約聖書は、単に、イエスの奇跡を記したのではなく、当時のユダヤ教、各派の情勢、宗教的風習などを熟知している者が読めば、現実になにが起こったかが忠実にわかるように書かれている、いわば、ダブルミーニング（二重の意味）により書かれているという説がある。

この暗号のようなダブルミーニングの方法を“ベシエル”と言い、「死海文書」の中に、その言葉が出てくる。死海文書は、その解説のヒントを多く含んでいるのである。

例えば、この文書が発見された場所、クムランにある宗団についての知識を得ることで、場所についての多くの矛盾や謎が解明できる。

クムランは、ユダヤ教の三大宗派の一つ、エッセネ派の亡命地であり、今も残るクムランの宗団の建物や洞窟は、エッセネ派のものであるというのが定説になっている。イエスも、そこにいた。彼らは、ここを自分達で複製したエルサレムと考え、そう呼んでいたそうである。また、建物のそれぞれの部分にも通称があった。

聖書の表記には、通常のエルサレムと末尾に、複数形のSをつけたエルサレムの二通りがある。複数形の方のエルサレムを、クムラン宗団の建物、すなわち、複製エルサレムだと考えると、聖書における場所の謎や矛盾が見事に、解消されるのである。

「新世紀エヴァンゲリオン」において、「死海文書」は、物語の鍵となっている。

これは、同時に、この物語が、ベシエルの技法に見られるように、その物語の裏に隠された意味がある、二重構造の物語であることを暗に示したものだだろう。この隠された意味を探っていきたい。

ところで、「死海文書」において、聖書のイエスに当たる主役となっているのは、「義の教師」、すなわち、洗礼者、ヨハネである。

ということは、新約聖書には、“ヨハネの黙示録”という、ヨハネが神から啓示を受けたとされるものがあるのだが、この黙示録が、この物語にとって（同時に、人類にとって）、重要な意味を持つ予言書であると考えることができる。

実は、黙示録には、人類の未来の予言と、一部の人間が、多くの患難を乗り越え、神に近づいていくプロセスが書かれている。その多くの患難の一つに、人類最終戦争（ハルマゲドン）があるのだ。そして、オープニングに登場する生命の樹には、人間が神に近づいていく方法が隠されている。

そして、患難を乗り越えた人類が、千年王国（地上楽園）を築くのである。

また、それとは対照的に、旧約聖書には、人間が、地上楽園であるエデンの園から追われ、神から遠ざかっていくプロセスが書かれている。そして、神から人間から遠ざけていくための方法は、当然、人間が神に近づいていく方法と逆であり、それが、オープニングに登場する、逆・生命の樹に示されている。今の、ほとんどの人類は、この逆・生命の樹によって、滅びの運命を歩まされているようである。この真相にも迫ってみたい。

黙示録から読み取れることは、本来、地上楽園から追われた人類は、この世紀末の患難を乗り越え、再び、神に近づいていくことを、神は望んでいるということである。神への道を指し示し、その手助けをしてくれる存在が、救世主であろう。

そして、予言を紐解く、ゼーレという存在は、一体、私達、人類にとって、どういう存在なのだろうか。救世主なのか、それとも、悪魔なのか、このことについても、真相を明らかにしたい。

ところで、この物語では、ピラミッドや眼といったカバラ的象徴が、いたる所に登場する。例えば、ゼーレの紋章である、七つの眼は、実は、キリストの聖体という象徴を表している。すなわち、この物語は、世界を影でコントロールしていると言われているユダヤ教の秘密結社“フリーメーソン”の存在なしに考えることはできないのだ。

したがって、この物語には、現実における示唆が含まれると言っていきたい。

○ゼーレと人類補完委員会について

フリーメーソンとは、「石工」と呼ばれ、ソロモンの神殿を作る、石工の集団といった意味合いから、もともと、救世主キリストが登場した時に奉仕するための集団であったと考えることができる。

そして、そのフリーメーソンの指令機構として存在している“イルミナティ”、これは、“覚醒者の集団”という意味があるが、ゼーレの正体は、そのイルミナティを模したものであるのだろうか。

また、人類補完委員会は、フリーメーソンにおける“300人委員会”を連想させる。表向きの組織として、人類補完委員会が存在し、それを裏で操っているのが、ゼーレではないだろうか。

●ゼーレのメンバーは、画面上、モノリス状の物質となって表されている人柱である。そのモノリス状の物体には、赤い電光文字で、SOUND ONLY と書かれてある。

モノリスとは、厚み、横幅、高さの割合が、正確に、1対4対9となっている6面体である。これは、「2001年宇宙の旅」や「2010年」に登場する謎の物体で、それらの作品の中で、生命の誕生と深い関わりのある何かとして、描かれている。

ゼーレが、モノリスとして描かれているということは、新たな「生命誕生」に深い関わりを持つ集団という意味が込められているのだろう。

ここで、「新たな生命＝新人類（超人類）」を生み出す、覚醒者の集団という図式を考えてみたい。彼らは、多くの秘密を知っているようである。

●人類補完委員会の中心人物は、キール・ロレンツ議長、碓ゲンドウ、そして、4人の外国人（米国・フランス・イギリス・ロシアの設定）である。彼らが、幹部会議を構成している。人類補完委員会の下部組織として、特務機関ネルフがある。

人類補完委員会は、実質的に、世界の政治を牛耳っているようである。

○セカンドインパクトについて

●セカンドインパクト・・・2000年に、南極大陸で、大爆発が起こり、南極の氷が溶けて、多くの都市が水没し、地軸が、ねじ曲がるほどのすさまじい出来事が起きた。それが、世界経済の恐慌と民族紛争・内戦の引き金になり、世界の人口の半分が失われることになる。

大質量隕石が、南極に落下したためと報じられたそれは、約40億年前にあったとされる小惑星との激突の名であるジャイアントインパクトになぞえられ、その名がついた。

しかし、真相は、謎につつまれている。この時、出現した光の巨人。そして、謎の組織ゼーレの存在が見えかくれしている。

ユダヤ教の思想の中には、救世主思想がある。これは、世紀末に、救世主（メサイア）が降誕するというものである。

実は、この物語全般に、色濃く流れているのが、この救世主思想である。例えば、次のように、象徴的に、それが語られている。

●ネルフ本部の最下層のターミナル・ドグマには、アダムと呼ばれている、巨大な人の

形をした何かが、幽閉されている。そのアダムの顔は、紫色で、ゼーレの紋章と同じく、逆三角形の線に、七つの眼がある。そして、アダムは、イエス・キリストと同じように、両手の掌を杭で打たれ、磔（はりつけ）にされ、下肢がなく、人間の足らしきものが多数生えており、体は白い。胸には、「ロンギヌスの槍」と呼ばれる、二股の槍が、突き刺さっている。この槍は、処刑人ロンギヌスがイエスを処刑したとされる槍である。

ここでのアダムは、間違いなく救世主（メサイア）としての意味づけがなされている。七つの眼は、キリストの聖体という象徴である。実は、ユダヤでは、登場するキリストのことを、天界の第四の御座の神の化身であり、その魂は紫の衣を着ていると言われている。顔が紫色なのは、そのことと関係がありそうだ。また、キリストは、聖書で、神の小羊と表現されている。体が白いのは、小羊の象徴と考えられる。

ところで、ドグマには、教義・信条といった意味がある。最下層のドグマに、救世主（メサイア）が、置かれているということは、ユダヤ教の根底の教義に、救世主思想が置かれていると捉えることができる。

この救世主思想を踏まえると、セカンドインパクトの一つの意味合いが見えてくる。セカンドがあるということは、隠れた意味として、ファーストを想定できる。では、ファーストの時期は？キリストが世紀末に現れるとすれば、ファーストは、西暦1000年だったと予想できる。しかし、この時、キリストは登場しなかった。すなわち、一回目のチャンスは、空振りに終わったのである。

そして、待望の2回目（セカンド）が、西暦2000年である。ユダヤ教が望むキリスト、メサイアは、ハルマゲドンにおいて、2000年の契約において、この世界を、地球を統治すると予言されている。この物語では、光の巨人＝救世主、が登場したと想定しているのである。そして、その光の巨人をアダムと呼んでいる。

また、科学的に分析するならば、どんなに狂いがあっても、今から約2000年後には、人類は滅亡するということと言える。それは、何によって滅亡するのかというと、地軸の逆転が、この時、起きると予想されるのである。

そのことを知っているフリーメーソンは、この物語の中で、セカンド・インパクトという表現を使って、示唆しているのではないか。だから、西暦2000年という数字と共に、地軸が、ねじ曲がり、南極の氷が溶けるという設定が成されていると捉えることができる。

すなわち、セカンドインパクトには、救世主の登場する時期である2000年と、これから約2000年後に人類が直面するであろう地軸の逆転という二つの意味が、示唆的に含まれていると考えることができる。

○ゼーレのシナリオとは

セカンドインパクトは、ゼーレが引き起こした人為的なものである。これは、次の場面において、理解することができる。

●西暦2003年、箱根のゲルヒン（人工進化研究所の略称）で、冬月は、礎ゲンドウに、こう迫っている。

「セカンドインパクトの裏にひそむ、君たちゼーレと死海文書を公開させてもらう。あれを起こした人間たちを許すつもりはない。」

冬月は、調査により、セカンドインパクトで「光の巨人」が出現していたことを知っており、手にした調査レポートには、エヴァと似た形状をした、光の巨人のシルエットをとらえた写真が載っていた。

□では、どうして、ゼーレは、セカンドインパクトを人為的に引き起こす必要性があったのだろうか。人類補完計画とは、一体、何なのだろうか。

それは、こう考えることができる。

ゼーレは、長い目で、人類の未来、すなわち、人類の子孫の系統を考えられるような智慧の持ち主であるとする。そうすると、当然、ゼーレは、この地球人類を、どのようにして生き残らせ、進化させるかを考えるはずである。

なぜなら、あまりにも欲望的な生き方をしている人類は、自らが招く地球の環境汚染等によって、自滅の道を歩んでいるからである。また、少なくとも、約2000年後、地軸の逆転が起きることを知っているゼーレは、今の人類が進化しない限り、すべて滅亡してしまうと考えているからである。

そして、人類を進化させるためのチャンスが、一度だけ到来する。それが、待望している救世主（メサイア）が、この地上に登場した時なのだ。なぜなら、「魂が進化する系譜においては、必ず救世主の存在というものが必要である。」とゼーレは、考えているからである。

また、ゼーレは、死海文書を初めとする、神の計画書とも言える予言を研究し、救世主が登場する時期、場所等を検討し、さらに、その予言に沿って、シナリオを作っているのである。ゼーレは、そのシナリオに従って、世界の動きを一つ一つ、合わせているのだ。そして、救世主が、この世に登場した時、淘汰された、生き残った魂が、新しい進化系の流れに乗り、例えば、地軸が逆転したにしろ、しないにしろ、結局、この地球は滅びるわけだから、その滅びる時にも、滅びないような系統を樹立しようとする。

これが、ゼーレが、救世主を探し、そして、「救世主が存在したら」ということを確信して、どんどん、世界を、ある意味で、破滅の方向、別の言い方をすれば、破滅から進化へ導いている理由なのである。

すなわち、破滅の危機をくい止めるために、より進化した魂の系譜の一群が、降りてくるはずだとゼーレは考えているのである。それが、救世主であり、救世主が率いる系譜なのである。その時から、この地球を、進化系に移行させることができる。

その、人類を進化系に入れていく計画が、人類補完計画なのだろう。すなわち、「今まで誰も成し得なかった神への道」なのだ。その実践方法の一つが、カバラである。

また、セカンドインパクトを引き金にして、経済恐慌、そして、民族紛争・内戦が引き起こされ、人口の半分が失われている。これも、すべて、ゼーレのシナリオ通りと考えることができる。

すなわち、現実の観点から、これを分析すると、彼ら（ゼーレ＝フリーメイソン）は、天変地異、経済恐慌、民族紛争・内戦、これら、全てを、実際に、裏でコントロールし、世界大戦を引き起こして、世界の人口を減らそうと考えている。

□では、彼らの世界大戦の狙いは何か。

それは、一段階目に、都会を死滅させること。

二段階目に、ある意味での無政府状態を作ること。

三段階目に、地球の統一的な政権を作ることである。

この三段階に、計画は分類されているようだ。

そして、そこまでの計画が一段落ついた所から、この物語の中心的展開が成されていると捉えることができる。

人口は、半分に減り、ある意味、地球に、統一的な政権ができあがり、ゼーレの支配が、より一層、確定的なものになっている。ゼーレ、人類補完委員会の下に、圧倒的な戦力を有するネルフが君臨し、実質的には、その下に国連軍（UN）がある。

実は、国連こそ、現実において、もともと、彼らが目指している、統一世界政府の原型である。

□では、どうして、彼らは、意図的に、戦争を引き起こし、人口を激減させ、統一世界政府を樹立しなければならないのだろう。

(※この物語を読み解くためにも、現実のフリーメーソンについての検討が、重要になってくる。少し、つつこんで、検討を加えてみよう。)

先に述べたように、フリーメーソンは、この人類を、より神々の方向に近づけようとしていることは、間違いない。しかし、彼らは、すべての魂を、神々の方向＝進化系に入れようとしているのではない。すなわち、時がない場合、それをセレクトし、そして必要のない魂を殺してしまうこともやむなしと考えているのである。

要するに、完全に、人間の中に、二つのジャンルを作る（神々の要素を有する者と、邪悪な世界の要素を有する者の二つを完全に区分する）ために、最終戦争を引き起こすのである。それは、彼らの、神との契約という選民思想に根ざした考えである。

しかし、予言された救世主は、どうだろうか。彼らだけを救済しようと思って、登場するのだろうか。それは、間違いなく、否である。救世主と、救世主の系譜は、すべての魂をできたら引き上げたい、すべての魂を救済したいと願うはずである。すべての魂を救済することを願ってこそ、真の救世主であり、その救世主の系譜こそ、本当に、神に選ばれた人類ということができるのではないだろうか。

そして、この二つの立場の違いは、最終的には、大きなぶつかり合いになることが、様々な予言によって示唆されているのである。それが、世界大戦の後半で生じてくる、最終戦争（俗にいうハルマゲドン）の模様ではないか。

すなわち、同じ神の計画書である予言書を紐解きながら、その予言の解釈は、二つの立場で異なっているのである。

このことは、皮肉にも、ユダヤ人である、偉大な予言者、ノストラダムスが、見事に、表現している。ノストラダムスの予言詩「諸世紀」を見てみよう。

諸世紀 5章 53番

「太陽の法則と金星の法則が相争う」

「そして、お互いに頑固にそれを受け入れない」

「お互いに予言を研究する」

「太陽の法則はメシアによって保持される」

この予言詩から読み取れることは、メシア（救世主）は、太陽の法則を説き示す。太陽の法則とは、根本的な宇宙の法則ではないか。救世主以外には、宇宙の法則を保つことはできないのである。

金星は、占星学上、ヴィーナスで象徴されるとおり、欲望、快楽、金銭、こういった現世的なものを示す。

□では、金星の法則の遂行者は、誰なのか。

結論から言うならば、俗に、「黒いフリーメーソン」と呼ばれる一群である。

□それでは、どのようにして、「黒いフリーメーソン」が生まれ、彼らは、どういう考えで、金星の法則を遂行しているのだろうか。

それは、イエス・キリストの滅後、ヨーロッパでは、次に、いつ救世主が登場するのかという待望の流れが存在した。そして、西暦1000年前後に登場するんだということで、多くの魂が、救世主を待ち望んだ。

しかし、救世主は登場しなかった。1200年経っても、1400年経っても、1600年経っても、1800年経っても、登場しなかったのである。

ところで、1700年代に、大きな一つの勢力が登場した。それが、今、フリーメーソンの母胎、中心的な指令機構となっている、前述の「イルミナティ」である。

いくら待っても、登場しない救世主に対して、彼らは、救世主の存在に、幻影を抱き、宇宙の法則に疑念を持ち、もともとのフリーメーソンの綱領である、「自由・平等・博愛」に、独自の解釈を加えた。

これが、黒いフリーメーソンが生まれた背景である。

□黒いフリーメーソンの唱える「自由・平等・博愛」とは何か。

（個々が自由に生きること、これこそが、最も必要なことであり、個々が平等に生きること、これこそが、最も大切である。そして、これらを達成させるためには、友愛＝博愛、つまり、お互いがお互いに対しての優しさが必要なんだ。）と考えた。

そして、こう考えた。(私達が、欲望を満足することを妨げているもの、それは国家機構であり、経済機構である。これら、すべてを撤廃してしまい、原始共産主義のように、自由で、あまり働かなくても済む世界をつくろうではないか。)

そして、50年、100年、200年と着々と計画を進めた。

(そのためには、宗教を打破する必要がある。なぜなら、宗教は、ある特定の価値を設け、その価値によって、人を支配するからである。よって、宗教がなければ、個々は、自分の欲望によって生きることができる。)

しかし、彼らは、自分達が唱える「自由・平等・博愛」の三つに、それぞれ矛盾が内在していることを知っていた。

(例えば、自由である。ある人が自由に金を稼ぐとしよう。ここで、お金の量が一定だとすると、ある人が、必ず貧しくならなければならない。ある人が自由だということ、相手を殺すならば、相手は生きるという平等の権利を失ってしまう。)

もちろん、自由、平等、これは、すべての魂が望んでいる言葉であったことは、間違いない。そして、この自由運動、平等運動が進んだのである。

ところで、この自由の旗頭が、自由主義である。

自由主義では、まず、一定の枠内、国家における憲法の枠内においては、自由に金を稼ぎ、自由に生活することはできる。

反対に、平等の旗頭が、共産主義である。

共産主義では、自由が、一定限、制約される。しかし、個々が、安い賃金で、いいモノを安く提供されるという仕組みを作ったのである。実際、今のロシアでは、核に対しても防衛できるような、素晴らしい地下鉄に、非常に安い金額で乗ることができる。これは、平等という旗頭の象徴なるが故にできる国家運営である。

つまり、彼らは自由と平等を両方つくって、どちらが勝つかテストしてみたのである。そして、自由は、人の欲望によって、働き、金を集めるという特徴があるから、自由の方に、当然、金が集まり、平等という下に、魂は墮落し、結果的には自由主義が勝ったかのように見えている。

しかし、この自由という中には、大きな国家的な制約があり、あるいは、平等という定義の前には、共産主義という国家の枠組みがあるから、この自由にしろ、平等にしろ、制約を受けたことは間違いない。

そして、彼らの、このテストが終了したが故に、一方の旗頭である、ロシアを閉じたのである。

最後に残ったのが、博愛のテストである。

つまり、PKO 法案や PKF が、まさに、博愛に対するテストであるということができる。すなわち、彼らは、プライドを背景にして、権力と金にまかせ、弱い者達を、力によって、支配し、平和を与えようというのだ。

そのためには、意図的に、民族紛争・内戦を引き起こし、ぐちゃぐちゃな状態を作らなければならないのである。そして、世界大戦につっこませ、そこに、力による平和、統一世界政府による、強制的な平和をもたらそうという計画なのだろう。

そして、これらの「自由・平等・博愛」は、すべて、欲望を満足させ、お金の経済を土台とした、国家運営のもとに実験されてきている内容である。それを、ノストラダムスは、金星の法則と表現しているのだ。

この金星の法則のもとに、人々は欲望の獣と化し、どんどん、邪悪な世界が形成されているのが現状である。

□金星の法則の支配を読み取れ。

彼らが、この人間世界を支配するために、何を考えているか、これは、人間と動物の差を検討すれば、よく理解できる。

もともと、私達も、「四つ足で歩いていた」ということになっている。しかし、私達が二本足で歩くようになり、一方、他の動物達は、テリトリーを防御するという防衛本能・嫌悪、多くのものを殺して食べるという貪り、セックス、戯れという遊び(スポーツ)、こういったものに翻弄されていた。その間に、人間は、必死に、火というものを手に入れた。これによって、人間と動物とは差を生じさせたとされている。

つまり、彼らは、これと同じことを、今の人間に対して行っているのである。

セックスによる「喜び」を与える。金を持たせることにより「喜び」を与える。生活に満足させる。そして、スポーツという「楽しみ」を持たせる。それから、「個人主義」、「自由」という、個人主義を与える。それから、「男女は平等である」という観念を与えることにより、闘争の本質をそいでしまう。そして、人間の思考力を完全に止め、無智化させた段階で、自分達は、必死に、ある程度の欲望を制御し、そして、普通の火以上の、核、プラズマを手に入れた。

これが、彼らと一般の人間の違いである。

もともと、ユダヤの経典である「旧約聖書」の中には、「燃える炎の輪に十字の剣」という象徴が出てくる。これは、人間よりも一つ高い意識状態を持つ、阿修羅と呼ばれる、低級な神の象徴と一致しているのである。彼らは、その要素が非常に強く、したがって、「半分神」といってよい存在だと想定できる。

今の人間は、智性が低く、彼らの金星の法則に、完全に支配されてしまっているのである。そして、物質によって、私達を支配するもの、これが、悪魔であると聖典では規定されている。実は、「黒いフリーメイソン」の信仰の対象は、この悪魔であるという一説がある。

●ところで、オープニングのエヴァ初号機には、12枚の羽が描かれている。この12枚の羽の象徴こそ、悪魔の王＝サタンの象徴なのである。

●また、セカンドインパクト時、大爆発の中心に、左右4枚の輝く羽が、成層圏にまで突き出ていた。形状からすると、12枚の羽の上部4枚に見える。第12話で、セカンドインパクトの時、ミサトの目の前にいた「光の巨人」は、エヴァンゲリオンに酷似している。爆発の時は、同じ巨人の脚の部分のみが見えていた。ターミナルドグマのアダムは、下肢がない。このことと関係があるかもしれない。

背後に潜む、悪魔の象徴に、我々は気をつける必要があるだろう。悪魔の象徴に、救世主のイメージ(＝ターミナルドグマのアダム)を重ねているのだ。また、ヒーローであるエヴァンゲリオン初号機にも、悪魔の象徴を、さりげなく重ねられている。

○二つの立場について

現実のフリーメイソン、また、この世界に行使されている金星の法則について、これまで、詳しく見てきた。

実は、フリーメイソンには大別すると、二つのタイプが存在する。

それは、予言を信じ、救世主の登場を待つグループと、もう一つは、「救世主の存在そのものが、実際は、幻影ではないか。つまり、現れてこないのではないかと考えて、この地上には、宇宙の法則が存在しないのだから、個々が自由に生きるということをポイントに、作り変えてしまおう」とするグループである。そして、この後者が、これまで述べてきた、俗に「黒いフリーメイソン」と呼ばれるグループである。この二派の対立は続いているが、今の段階では、後者の「黒いフリーメイソン」が大勢を占めているようである。□この二つの立場は、実際に、救世主が登場した時、どのような対応の違いを見せるだろうか。

まず、彼らは、その候補者をテストするだろう。彼らは、今の人間に対して、絶対的な支配関係を形成している魂の一群である。当然、自分達を包含できるような、対象なのかどうか、確かめることだろう。もし、救世主に足る対象でなければ、そのまま葬り去ることも考えられる。

そして、黒いフリーメイソンは、救世主を否定するところから、今の地球の支配を形成してきた。ここで、自分達の支配にしがみつくと者は、救世主そのものが、すでに、自分達の野望を妨げる唯一の対象に変わってしまっている。そして、救世主を引っ張り出し、救世主と対決しようとするだろう。あるいは、救世主に奉仕する立場に戻る者も、中にはいるかもしれない。いずれにせよ、救世主の力量によって、世界の未来は、まったく異なったものになるだろう。

また、もともと救世主を待ち続けた、智慧ある者達は、まずは、静観し、事態の推移を見守ることだろう。黒いフリーメイソンに負けてしまうような対象であれば、自分達の待ち望んできた救世主とは、程遠い存在だからである。そして、十分、吟味をした後、もともと、自分達の存在の意味である、救世主に対する奉仕という使命を遂行するだろう。この時、救世主が率いる一群が、すでに存在するならば、そこに、加わることになるだろう。ここで、フリーメイソンが、その救世主に対する立場の違いにより、二分化することが予想できる。

かくして、救世主及び精神的立場を重んじる陣営と、物質的立場を重んじる陣営(背景には、悪魔がいる。)は、真つ向から、激しくぶつかりあうことになるのである。これが、最終戦争の様相となるだろう。この物語は、主に、その最終戦争を裏側のテーマとしているように思う。

○ロンギヌスの槍について

キリスト教伝説によると、イエスが磔に処せられた時、死の確認のため、槍を、そのわき腹に突き刺した兵士が、ロンギヌスである。その時、槍の穂先から、滴り落ちた血が、彼の眼を癒した。この奇跡で、彼は回心し、洗礼を受け、後に聖人になった。その槍を、「ロンギヌスの槍」と言い、この槍を手にした者は、世界を制するという伝説を産んだ。

●第12話では、ゲンドウらが、南極から槍状のものを持ち帰る。

●第14話では、レイが操縦する零号機によって、この槍が運ばれている。

●第15話では、ネルフ最深部で磔にされているアダム(カヲルによるとリリス)に、とどめを刺すかのように、突き立てられている。

●第22話では、第15使徒せん滅のために、ゼーレの意向を無視し、ゲンドウは、レイに、ロンギヌスの槍を使うことを命ずる。そして、放たれた槍は、成層圏を突き抜け、宇宙空間の第15使徒をせん滅した後、月軌道に移行し、宇宙を漂っている。

●第24話では、エヴァ初号機の前で、ゲンドウは、「まもなく最後の使徒がわれわれの前に現れるはずだ。それを消せば願いがかなう。もうすぐだよ、ユイ。」と語りかける。その後、ゲンドウは、ロンギヌスの槍の消失を「我々の願いを妨げるロンギヌスの槍は、すでにないのだ。」と語っている。ゼーレは、この槍の使用に対して、ゲンドウの解任の理由として検討している。

この槍は、イエス・キリスト（救世主）が処刑された時と密接な関わりを持つものである。この槍に対して、ゼーレとゲンドウは、明らかに、態度を異にしている。

この立場の違いを、前述の、フリーメイソンの二つのタイプに、重ねることができないだろうか。すなわち、ゼーレの基本的スタンスは、黒いフリーメイソンと同等のものであり、ゲンドウは、救世主を待望し続けている、救世主肯定のスタンスの象徴と考えられないだろうか。だからこそ、救世主を、この世から葬り去るための、ロンギヌスの槍を、ゲンドウは手放した。そして、それにより、彼の願いは、妨げられることはないのである。一方、ゼーレは、救世主と対決する時の切り札とも言える、ロンギヌスの槍を失うことに対し、うろたえるのである。

つまり、同じくゼーレに属していながら、ゼーレとゲンドウは、予言の解釈を異にし、それぞれが捉える人類補完計画も、思惑が別の所に存在しているのである。

○約束の時について

ゼーレと碇ゲンドウが共に意識している「約束の時」とは、黙示録を背景に考えると、千年王国の到来を意味していると考えられる。その時、人類は滅亡し、生き残った、新しい人類（＝超人類）が、地上樂園（＝千年王国）を築くと言われている。

ある死海文書の研究者は、それが、2018年と記載されていると言っている。第3使徒の登場が、2015年だから、ほぼ、年代的なものは一致する。

ネルフ本部があるジオフロントには、この地上樂園のイメージが重ねられているように思う。実は、カバラを初め、神智学は、チベットのシャンバラ思想に大きな影響を受けている。地底に、理想郷であるシャンバラ王国が存在し、地上のどこかに、シャンバラに通じる場所があるという。そのシャンバラ思想が背景にあって、ジオフロントの設定がなされているのではないだろうか。

●第1話で、初めて、ジオフロントを目の当たりにしたシンジに、ミサトは、次のように言っている。「これが、あたしたちの秘密基地ネルフ本部。世界再建の要、人類の砦となる所よ。」

●第17話、第3新東京市を眺めながらのゲンドウと冬月の会話。

冬月「街、人の作りだしたパラダイスだな。」

ゲンドウ「かつて、樂園を追い出され、死と隣合わせの地上という世界に逃げるしかなかった人類。そのもっとも弱い生物が弱さゆえ手に入れた知恵で作りだした自分達の樂園だよ。」

冬月「自分を死の恐怖から守るため、自分の快楽を満足させるために自分達で作ったパラダイスか。この街が、まさにそうだな。自分達を守る武装された街だ。」

ゲンドウ「敵だらけの外界から逃げ込んで臆病者の街さ。」

冬月「臆病者の方が長生きできる。それもよからう。」

この会話にも、樂園が出てくる。そして、街（人間の作りだしたパラダイス）は、真のパラダイスではない。しかし、冬月は、人間的な眼差しで、この街を見つめている。ゲンドウの視点は、異なっている。

●最後の使徒、カヲルは、ヘブンズドア（天国への扉）を開く。

地上樂園（＝千年王国）が、どのようにして訪れるのかも、ゼーレとゲンドウとは、考えが食い違っているのだろう。

患難を乗り越えた人類に、天への門が開かれようとしている。そのことは、予言によって、約束されている。しかし、その真実は、神のみぞ知るのではないだろうか。